世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

動詞の表記

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中川, 秀太 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1121

動詞の表記

中川　秀太

1.　はじめに

本稿では和語動詞の表記についてNHKの六つの表記辞典を用い，その特徴を検討する。実例の確認のため，編集者による丁寧な用字・用語のチェックを経て刊行される『NHK年鑑2018』を併用する。戦後のNHK表記の変遷を見ることにより，現代日本語の標準表記を考えるうえでの参考になることを狙う[(1)]。また筆者は『NHK漢字表記辞典』(2011)の編集に携わった者であり，今後，辞書の改訂を行うことになった際の検討課題として何があるのかという観点からも論じる。総称としてNHKの辞書を指す際は『NHK』とし，個々の辞書は2011年版（上記の『NHK漢字表記辞典』のこと）のように記す[(2)]。

2.　NHKにおける動詞表記の変遷の概要

2.1　『NHK用字用語辞典』(1965)

『NHK用字用語辞典』は放送で使う約26,000語について，その表記を検討したものである。「当用漢字表」(1946),「現代かなづかい」(1946),「送りがなのつけ方」(1959)に基づくが,「現代の感覚でかな書きのほうが適切だといったものは，ドシドシかな書きに変えてしまったし，また，反対に当用漢字ではないが，どうしてもその漢字がほしいといった場合には，あえて漢字表記を採用した」という（同書の「まえがき」)。動詞表記について,「おこなう」「ことわる」などは「送りがなのつけ方」に沿った「行なう」「断わる」が標準表記であった。また「当用漢字表」の音訓には，異なる動詞が同じ表記にならないようにとの配慮が施されていたため，たとえば「入る」と書くのは「いる」のみで，表外訓の「はいる」はかな書きであった。このような点で2011年版と表記が異なるものの，動詞3,877語（2011年版の動詞の総数）のうち，約7割にあたる2,705語の表記は2011年版と同じである。

2.2　『NHK用字用語辞典　第2版』(1973)

『NHK用字用語辞典　第2版』は1972年の「当用漢字改定音訓表」（内閣告示は1973年）と「改定送り仮名の付け方」（1973年に「送り仮名の付け方」として内閣告示）に基づき，一語一語の表記を検討したもの。「当用漢字改定音訓表」および「「異字同訓」の漢字の用法」（1972）の影響を受けて表記が変更された動詞もある。ただ

し「合う」「会う」に対し「あう（遭う）」はかな書きを優先するというように，NHK独自の判断をしているものもある。「行なう」「断わる」は「行う」「断る」が標準となり現在に至る。「改定送り仮名の付け方」に示された「許容」については「画面の文字数が多く，送りがなを削ることにより，よりよい表現が形よく納まる場合に限定して送りがなを省くことを認める」（「基本方針と原則」の p.24）とする。これにより「生まれる」が「生れる」と表記されることもありえた。この決まりは 2004 年版の『新用字用語辞典　第 3 版』まで続くが，2011 年版の『漢字表記辞典』では，許容を認めず「生まれる」のみを使うよう変更される。また「当用漢字改定音訓表」により「はいる」が表内訓となり，「いる」も「はいる」も「入る」と書くことになった。

2.3 『新用字用語辞典』（1981）

『新用字用語辞典』（約 30,000 語）は 1981 年の「常用漢字表」に合わせて編集された。「「NHK 編　新用字用語辞典」の刊行にあたって」には「当用漢字表によって，かな書きやほかのやさしい漢字への書きかえが定着した語については，その表記を尊重した。「ことば」という語は，かな書きを第一の表記とし，「言葉」を第二の表記としたのはその一例である」という文言が記される。「面白がる→おもしろがる」など動詞の表記にも同様の判断がうかがえる。

2.4 『新用字用語辞典　第2版』（2001）

『新用字用語辞典　第 2 版』（約 36,400 語）は国語政策に合わせて編集したものではない。「「NHK 新用字用語辞典」の改訂にあたって」に記される「常用漢字を基本としながらも，NHK が認めれば常用漢字以外でも使えるようにすることとし，その趣旨を「原則」に」盛り込んだとあるのが主な改訂理由である。この版では動詞「狙う」の漢字表記が独自に認められた。

また，日本新聞協会の新聞用語懇談会が 2001 年 5 月 31 日の合同総会で常用漢字と同様に使うことを認めた「詣でる」「腫れる・腫らす」「賭ける」（表外字を含むもの），「証す」「癒える・癒やす」「描く（かく）」「応える」「委ねる」（表外訓を含むもの）については，「原則」の p.41 で「NHK として採用するかどうか現在検討中であり，取り扱い注意」とした（上には動詞の場合のみを掲げた）。

2.5 『新用字用語辞典　第3版』（2004）

『新用字用語辞典　第 3 版』は「社会一般での漢字の使用実態に合わせて新たに「読みがななし」での使用を認めた 37 の漢字と，それを使った表現など 400 余り」の処理のために改訂された。そこに前述の「詣でる」以下の語も含まれる。たとえば「いえる」は 2004 年版で「癒える」と漢字表記することになった。

2.6 『NHK漢字表記辞典』(2011)

『NHK 漢字表記辞典』(約 35,000 語)は 2010 年の「常用漢字表」に合わせて編集された。「①もてあそぶ②弄ぶ」など「読み方が難しい訓読みの語は,「ひらがな優先」(①ひらがな②漢字)とする」という方針がとられた(「原則」の p.8)。それまでも許容表記が示されていたものの,たとえば「する〈擦る〉」のように示され「する」が標準表記,〈 〉内の「擦る」が許容表記であった。視覚的には番号で示すほうが理解しやすい。NHK が独自に使用することにした動詞の訓には「炒める(いためる)」がある。

以下では『NHK』の①②表記をたびたび示すため,本稿の筆者による箇条書きなどを記す際は㋐㋑を使う。同じ見出しのもとに二つ目の箇条書きを示す際にはⒶⒷを用いる。

3. 同表記語の使い分け

動詞には「汚れる(けがれる・よごれる)」のように,送りがなによっても区別できないものがいくつもある。「当用漢字改定音訓表(案)」(1970)が発表された際,菅野・浅井(1970, p.58)は「今回ふえた音訓の中で,問題となるものの一つに,同字異訓がある」とし,文脈によって区別が可能だという考え方に対して「同じような意味で使われることばが多く,必ずしも,明確に読みわけられるとはかぎらない」と述べた。「汚す(よごす・けがす)」「記す(しるす・きす)」「怒る(おこる・いかる)」「得る(うる・える)」「入る(はいる・いる)」などがこれに該当する。下線部は追加された訓である。「きす」はすでに廃れ,使うにしても「記する」の形で使う,「いる」は複合動詞の後ろ側や慣用句に限られるといった理由から除外できるとしても,残りの動詞の読み分けは依然難しい。「おこる」のほうが場面の種類や話し手の層を問わない中立的なことばだとしても,書き手がどちらを意図したのかは,読みがな(たとえば「怒(いか)る」または「怒る(いかる)」のようなかな表記)がないと不明である。

『NHK』が「うる」「える」について「〜ところが大きい。(「…しうる」は,なるべくかな書き)」と「地位を〜。(「…しえる」「…しえない」は,なるべくかな書き)」としたのは,単独の形では「うる」(文語的)の使用が限定的であり「える」が一般的であるのに対し,複合動詞の後項としてはいずれの形も使われるためである。

以上のほかに,意味に着目して,書き分け・読み分けの基準を探る方法もある。寺村(1992, p.26)は動詞の共起制限(動詞のとる名詞の種類に意味的な制限があること)の違いで説明できる類義語として「だく」「いだく」を挙げ,「〔具体物を〕ダク」「〔抽象概念を〕イダク」と記した。「いだく」には「だく。「互いに肩を―・いて再会をよろこぶ」 ▽文語的」(『岩波国語辞典 第 7 版新版』,以下『岩国』)の意味・用法もある点を考慮すると,表記辞典への掲載方法としては次のような形が考えられる。

(1)　いだく【抱く】〈抽象的〉希望を抱く，疑問を抱く。(「わが子をいだく」(文語的) などの場合は「だく」と同表記。読みがなをつけるなどの対処が必要)

(2)　だく【抱く】〈具体的〉子どもを抱く，肩を抱く。

こういった注意喚起がないと，「希望を抱く→「希望をダク」と読む→それが広まる→ことばは変化するものだからそれでもかまわない」という考え方に人々が陥る恐れがある。

「汚す (けがす・よごす)」も『岩国』の「けがす」は「「よごす」に対し，精神面・道徳面について言う」および「よごす」は「「けがす」に対し，具体的な物について言うことが多い」という記述を参考にし，以下のように記す方法が考えられる (「けがれる・よごれる」も同様)。

(3)　けがす【汚す】〈精神的・道徳的〉心を汚す。家名を汚す。

(4)　よごす【汚す】〈具体的〉ズボンを汚す。手を汚す (比喩的にも)。

「海を～」という場合，具体的な意味では「よごす」であるが，聖なる海を不浄の場所にしてしまうという精神的・道徳的な面を前に出すなら「けがす」という言い方もありうる。両方の動詞に「読み手に配慮し，かな書きや読みがなを活用する」とでもいった注記を添えるのが有効である。

同様の動詞に「開く (あく・ひらく)」「描く (えがく・かく)」「盛る (さかる・もる)」などがある[(3)]。また終止形は異なっても，連用形 (いわゆるテ形) が同じ形の「勝って (かって・まさって)」「通って (かよって・とおって)」もある。「通って」は「X が Y にかよって」「X が Y をとおって」のように区別できる。「勝って」は「X は Y に一度かっている」のように勝利経験を問題にする場合は「かって」に限定されるが，「この味は甘さより塩けが―・っている」(『岩国』。「勝つ」の第 3 の意味) のように 2 者の性質を比較する場合は「かって」か「まさって」か容易には判断できない。

「さかる」「もる」は自他の違いで区別できるが，「あく」「ひらく」は，「とびらが～」(自動詞用法) や「口を～」(他動詞用法) では「あく」と「ひらく」で読み分けに迷う。「幕が開く」(芝居が始まる) のような，やや専門的な語について「この意では，「幕がひらく」は誤り」(『明鏡国語辞典　第 2 版』) のように注記せざるをえない事態も生じている。

日本新聞協会の新聞用語懇談会が 2001 年 5 月 31 日の合同総会で常用漢字と同様に使うことにした表外字 39 種と表外音訓 9 字種 10 訓の中に「描く (かく)」が含まれていた。『NHK』の 2001 年版では「NHK として採用するか現在検討中であり，取り扱い注意」とし辞書の用例集には「かく〈▲描く〉」と記したが，2001 年の第 1229 回放送用語委員会でこれらすべての字種・音訓を採用することに決め，2002 年 4 月

から使い始めた。そして『NHK』の2004年版では「描く」が標準となった（「描く油絵を～」とある）。2011年版には「油絵を～。地図を～。（「エガク」とも読む）」という注記が施された。このようないわゆる「とも書き」については，原則のページで「本文に「Xとも」と記した語については，書き手の意図した語形が伝わるよう，かな書きや読みがなといった工夫が要る」と説明しておくとよいのではないだろうか。

表記辞典は書き手が語を書き分けるために必要な辞書であるが，その一方で読み手が迷わずに語を特定できるようにするための工夫を載せる辞書という観点も大切である。そのためには上記のような動詞の意味情報が注意事項として参照できる形になっていることが望ましい。

4.　異字同訓の問題について「合わせる・併せる」を例に考える

「当用漢字表」時代に刊行された1965年版の『NHK』では，異字同訓が問題になる動詞は漢字で書かずに，かな書きを活用する方法がとられたが，「当用漢字改定音訓表」時代の1975年版および「常用漢字表」に基づく1981年版以降の『NHK』では，「図る・計る・測る・量る・謀る・諮る」のような動詞について，意味による使い分けを示す必要に迫られた。以下では「合わせる・併せる」に絞って現行表記の問題点を考察する。

2011年版の『NHK』には「あわせて」と「あわせる」は次のように記される。

(5)　合わせて　（合計・一致させる）～1万円

(6)　併せて　（同時に）～健康を祈る。この見本も～ご覧ください。

(7)　合わせる　（合計・一致させる）答えを～。調子を～。つじつまを～。

(8)　併せる　（統合・同時に）2つの会社を～。清濁併せのむ。

一般の国語辞典で「合わせて」は「（副詞的に用いる）いっしょにして。全部で。「―一万円」」，「併せて」は「（接続詞的に用いる）それとともに。同時に。「平素の疎遠を謝し，―皆様の御健勝を祈り上げます」」（『大辞林　第4版』から）と記述される。動詞の「合わせる」「併せる」は，「併せる」を『NHK』から削除したほうが表記のゆれが抑えやすい。「併せる」に「同時に」とあるため，「Xにあわせて○○をする」などという場合に「合わせて」なのか「併せて」なのかと迷う書き手が出るからである。「2つの会社を～」という場合は「合わせる」で不都合なことはなく，違和感があるなら「合併する」「統合する」と言いかえれば済む。「併せる」と書きたい書き手への譲歩をするのであれば，動詞の「あわせる」は原則として「合わせる」であるとし，「「合併する」の意では「併せる」と書くことも」と第2候補として「併せる」を掲げるというのが穏当な示し方である。

「あわせる」の大きな問題は格助詞の「と」が出現する点である。(9) が「基準Xにあわせて」という形式で使う通常の「あわせる」の用例，(10) が「と」の使われ

た例である。以下の用例は，いずれも『NHK 年鑑 2018』から。

(9)　『連続テレビ小説』「わろてんか」の終盤の放送に併せ，セット公開を実施した。※ 2011 年版の『NHK』どおりであれば「合わせて」とすべきところ。

(10)　ラジオ・FM 自営無線回線の整備　A バンド（3.5GHz 帯）から M／N バンド（6.5／7.5GHz 帯）への周波数移行整備を，装置の老朽更新と併せて進め，……

これに対しては，㋐「に」を使い「老朽更新にあわせて」とする，㋑「あわせて」ではなく「と同時に」「と同じタイミングで」「とともに」などを使う，といった方法がとりうる。次も同様である。

(11)　各サーバーや端末のうち，保守期限が終了する一部装置の更新を 15 年度から 3 か年で実施した。また，大規模災害時に収録素材が増加することを想定し，ニュース制作用サーバーとニュース用アーカイブの蓄積容量を更新作業と併せて増強した。

この例は「右手と左手をあわせて拝む」（「右手を左手とあわせて拝む」も可）のような通常の「X と Y をあわせる」の一種としては解釈できない。「更新作業と蓄積容量をあわせて増強する」となり，述語の不一致が起こるからである。一方 (10) を「周波数移行整備と老朽更新をあわせて進める」の語順にしてみると，これは「同時に」の意味になり，「あわせて」が語と語をつなぐ接続詞として使われていると考える必要がある。ただし用例には「X と Y をあわせて」の形はなく，「Y を X とあわせて」（X は Y より前に既出）という構文的な環境で使われているものが多く，書き手が接続詞として意図的に使っているとも言い切れないところが残る。このような接続詞的な用法の実態については，文法の問題として検討を要する [(4)]。

次のように「に」を用いた例も用例として見られることを考えると，「と」でなければ困る特別な理由もないようであり，前述の㋐か㋑の方法をとるほうが無難である，ということをここでの結論としておく [(5)]。

(12)　ラジオ送信設備の整備　設備の信頼性向上を図るため，老朽更新に併せラジオ放送機の 2 台化整備を進めている。

5.　かな書きする動詞

表内字，表内音訓で漢字表記できる語であっても，何らかの理由で動詞の全体もしくは一部に対し，かな書きが選ばれることもある。以下では，そのような語の特徴を考察する。

5.1　意味以外の要因により，かな書きが生じる場合

5.1.1　当て字を使う動詞および前項が1拍の複合動詞の表記について

『NHK』は「常用漢字表」の「付表」に載るもののほかには，原則として当て字を使わない表記を推奨する。それゆえ次のような動詞は，かな書きが標準表記で，カッコ内の漢字は使わない。

（13）　ぐずつく（愚図），ごまかす（誤魔化），ちぎる（千切）

これに類する語に「取りしきる（取り仕切る）」がある。単独では「仕切る」が標準表記であるが，複合動詞の後項としては漢字で書く必要性が低いと判断された。「仕」は動詞「する」の連用形「し」を表し，「仕」が有する「（人に）つかえる」の意とは無関係な当て字である。それゆえ「しまう〔▲了・▲終・仕舞〕」などが全ひら（語全体をかな書き）であるのと同様の扱いにすることが考えられるが『NHK』では1965年版から「仕切る」と書く。「仕」を含む動詞は「仕上げる」「仕入れる」などほかにもあり，「仕」をかな書きにすると「し上げる」「し入れる」となる。

「とまどう」の「と」が「接辞。もと，夜中に目をさました時，方向が分からなくなる意」（『新明解国語辞典　第7版』）であるならば，「戸」「途」を使う意義が薄い。1965年版では「とまどう」であった。しかし1973年版から「戸惑う」になり今に至る。「と」のみをかなで書くとすれば「と惑う」となるが，視覚的に抵抗がありそうである[(6)]。これは漢字本来の意味が生きている「居る」の場合にも観察される。たとえば『新選国語辞典　第9版』では単独の「いる」は「いる・居る」というように，かな書きが優先されるが，「居並ぶ」「居残る」など複合動詞の前項の場合は「い並ぶ」「い残る」の選択肢がない[(7)]。つまり「1拍からなる前項＋後項」から構成される複合動詞（前項が名詞や接辞である場合を含む）の表記は，㋐「ちぎる」など，その動詞に漢字表記が必要ないと判断される場合は全ひらにする，㋑「仕切る」など，表内字・表内音訓の範囲で書けるのであれば，当て字的な表記であっても漢字表記を認める，㋒表外字・表外音訓を含む場合は全ひら，または例外的に前項のかな書き・後項の漢字表記を認める，といった手続きにより標準表記が選ばれていることが観察され，「し切る」「い並ぶ」など「かな1文字の前項＋漢字とかなを使う後項」という文字列はさけられているとまとめられる。「ちぎる」は連濁していることが「切る」とのつながりを断つうえで役に立つ。一方「いならぶ」「いのこる」などは「ならぶ」「のこる」単独の場合に漢字表記をしているため，「並ぶ」に対する「いならぶ」というように，複合動詞に限ってかな書きとする正統な理由が考えにくい。それゆえ全ひらは選びにくく，前項のみをかな書きという方法もとりにくい。それゆえ「いる」単独の場合はかな書き，複合動詞の前項としては，見やすさを考慮し漢字表記というように，別個の規則を設ける必要が生じたということである。

㋒の理由で全ひらにするものには「いぶく（▲息吹く）」「めいる（▲滅入る）」な

どがある（▲は表外音訓の記号）。一方，「し直す（仕・▲為）」「し残す（仕・▲為）」など「為」を用いる可能性のある動詞は，「仕」が標準とは判断しにくく（「仕直す」「仕残す」を載せない国語辞典が多い），単独の「直す」「残す」や「やり直す」「やり残す」などの場合と表記がずれることをさけたいといった理由から「し」が1拍ではあるものの，全ひらが採用されていない。「し」が「する」の活用形であることもはっきりしている。

5.1.2　そのほかの要因

『NHK』（2011年版）には，㋐複数の漢字表記が存在し，一つに限定しにくいのでかな書き，㋑表外字・表外音訓の部分をかな書きするのに合わせ語全体もかな書き，㋒かな書きの慣用を重視，㋓「してあげる」の「あげる」など「なるべくかな書き」と指示（18語），といった動詞も見られる。

㋐の例に「おもだつ（主立つ・重立つ）」などがある。国語辞典には「主立つ」を標準表記とするものもあり，書き手によっては漢字表記は誤りかという疑問をいだくことがある。

㋑の例は「いきりたつ（いきり立つ）」（丸カッコの外が『NHK』の表記）のような場合であり，「いきり立つ」を標準とする国語辞典もある。『NHK』も「奮い立つ」の場合は漢字表記とするので，「勢いがつく」の意で「たつ」を後項として使う場合に，すべてかな書きとするわけではない。これらの表記を採用した1965年版の編集の際に，「いきり」がかな書きであるなら，「たつ」もそれに合わせてかなでよいという判断が働いたと考えるほかに特段の理由は思いつかない。同様の例を探すと「かさばる（かさ張る）」（「角張る」は漢字），「たどりつく（たどり着く）」「のけぞる（のけ反る）」などがある。漢字で書いた場合の1字目が表内字・表内音訓であるなら，前に来る助詞などとの区別のために漢字を選びたくなることもあるが，1字目が表外字・表外音訓であるためにかな書きをするのであれば，後半部分は漢字で書いたところで特段の利点はないと判断されたものと推測する。かなで書いても字数が変わらない点も，変更されずに来たことの要因となる。

以上の㋐㋑は，かな書きを尊重する過去のNHKの方針がそのまま残る例だと考えられるが，漢字を用いた表記が国語辞典に標準表記として載ることを考慮すると「①かな　②漢字」（①は優先的表記，②は許容表記）とし，「①NHKの伝統的・慣用的な表記　②「常用漢字表」などに沿った表記」という示し方を考えてもよいのかもしれない。

㋒には動詞55語が当てはまる。「①する　②擦る」の場合，1973年版からは漢字表記できる語であったが，長らくかな書きが優先されてきた。表外音訓ではあるが，「かする」「こする」「さする」「なする」など多くの動詞に「擦る」の表記が使われるこ

とを考慮した可能性がある。

5.2　意味がかな書きの要因となる場合

5.2.1　基本動詞の表記

ここで基本動詞と呼ぶのは「ある」（比較の都合上「ない」も扱う），「いる」「できる」「なくす」「なくなる」といった物事の存在や出現を表す動詞である。『NHK』では，これらを補助用言として使う場合はかな書きにするものの，本動詞は「①ある　②有る」「①ある　②在る」「無い」「居る」「出来る」「無くす」「無くなる」というように「ある」以外は漢字表記を標準とする。「ある」は，どちらの意味も実際の原稿などではかな書きされるのが一般的である。「障害のある人」「どうあるべきなのか」など（『NHK 年鑑 2018』）。ほかの語は漢字表記しか示されていないので，実際にも漢字表記が普通だと期待されるが，どうもそのようにはなっていない。上記の年鑑で確認すると「これまでにない」「500 人いるアナウンサー」「筋肉中に骨ができる難病」，「垣根がなくなり」（「なくす」は用例がない）のように，いずれもかな書きが多い。つまり辞書による漢字表記の規範が及ばないほど，かな書きしたいという書き手の心理的な欲求が強い。この問題について宮島（1970,pp.17-18）に詳しい考察がある。宮島は補助動詞について「いちばん形式化してしまった「である」の「ある」だけは，明治時代からかなでかかれていて，「で有る」とかく方がすくなかったが，ほかは，たいてい漢字でかかれていた」と述べたあと，「明治のすえから大正にかけて，何人もの作家」が「て居る」から「ている」へと表記を変えていると指摘する。さらに「ている」のような用法は頻度が高く「かなのかたちで視覚になじむ」結果「いわゆるゲシタルトができやすい」という（ゲシタルト＝ゲシュタルト）。そして「「よんでいる」のばあいに「いる」が安定したとすれば，「先生が居る」のばあいにも「いる」と書きたくなるのが当然だ」と述べる。補助動詞の表記が本動詞に影響を与えたという見方である。

以上に関連し，戦前「漢字は副詞，接続詞などを含む体言と，用言の語幹に，仮名は，用言の語尾，副詞・接続詞，時には名詞などの「送り仮名」および助詞，助動詞に用いるのが原則だった」という浜田（1961,p.7）の指摘がある。戦前は本動詞の「いる」は「居る」と書くのが漢字かな交じり文を整えるうえで必要とされ，それが本動詞の表記にかなを用いることを防ぐ役割を持ったのに対し，戦後の「当用漢字表」時代は「もらう」（「貰う」は表外字）や「やめる」（「止める」は表外訓）をかな書きすることになり，「用言の語幹」は漢字という原則が崩れる。それゆえ，すでにかな書きが増えつつあった補助動詞に加えて本動詞「いる」にもかな書きが出やすくなる。

以下では，このような考え方を補助動詞としての用法を持つ「ある」「いる」以外の和語動詞に応用してみる。「上げる」「致す」「置く」「見る」「下さる」「下さい」「頂

く」「参る」「申す」「いらっしゃる」「居る（おる）」「呉れる」「貰う」「遣る」などが該当する。一般的に使う漢字のない「いらっしゃる」に加え，「おる」以下の動詞は表外字・表外音訓を含むため，かな書きが標準表記となる。「置く」「見る」は補助動詞の用法ではかな書きが出やすいものの，本動詞の用法では漢字表記が一般的である。これは本動詞と補助動詞の書き分けをやめて簡便化しようとする心理よりも，個々の漢字が文中で語を特定するのに役立つ，などと捉える心理がまさった結果とも見られる。宮島（1970）では「置く」などもかな書きが進むと考えられたが，その頃より現在はなるべく漢字表記をするという傾向が強くなっている。残りの敬語動詞について，補助動詞の用法を持たない「伺う」を含め，いくつかの表記辞典の本動詞としての記載を確認すると，次の表のようになる。

『教科書』は東京書籍の『教科書　表記の基準 2018 年版』（『教科書』）を指す。同書は東京書籍の許可を得て使用した。

表　本動詞用法における敬語動詞の表記

	NHK	教科書	共同	読売
あげる	△	あげる	あげる	△
いたす	△	いたす	×	×
いただく	頂く	頂く／いただく	頂く	頂く
うかがう	伺う	×	伺う	伺う
くださる	下さる	くださる	下さる	×
ください	△	ください	下さい	下さい
まいる	参る	参る	参る	参る
もうす	申す	×	×	申す

「△」は敬語の本動詞としての記述がないため（補助動詞はかな書きとある），その表記が判断できないことを表す。「×」は敬語としての項目がない場合。『教科書』が「伺う」「申す」を示さないのは，「負ける」の意味ではかな書きとする「参る」などと違い，特別な書き分けもなく漢字表記で迷うことがないと判断したものと考えられる。なお『教科書』の「いただく」を「頂く／いただく」と示したのは「土産を頂く」「（食事などを）いただく」という書き分けが示されているためである。「もらう」の謙譲語としては漢字，「食う」「飲む」の丁寧語としては、かな書きという書き分けであるが，普通の書き手にとっては，使い分けが難しいかもしれない。

基本的な意味は漢字で「棚に上げる」「思いを致す」「雪を頂く」と書くのに対し，敬語の意味で同様の表記をすることに違和感があると考えれば，『教科書』のようにかな書きの選択肢が生じる。また漢字が上下の身分関係を意識させると考えれば，「あ

げる」「くださる」「ください」などのかな書きが選ばれる。このような意味的条件が「伺う」「申す」にはなく漢字表記が安定する。また「置く」「見る」と異なり，敬語の「あげる」「いただく」「くださる」などは本動詞の場合と補助動詞の場合とで意味に顕著な差がない。それゆえ用法によって書き分けることについての違和感も生じる。「参る」は『共同』『読売』が「～てまいります」のような補助動詞の場合にかな書きとしているが，本動詞は「参る」が安定し，「まいる」とする傾向が強くないようである。「参拝」「参詣」「参上」など「参る」の意味を含む二字漢語の存在が「補助動詞と同様にかな書き」という流れを押しとどめている可能性がある。

5.2.2 「いく」と「くる」

以下では単純動詞のうちさまざまな名詞と組み合わさり，用法ごとに複数の漢字の使い分け，あるいは漢字とかなの使い分けがある語について，表記の目安をどこに求めればよいのかを探る。

「行く」「来る」は「消えていく」「やってみる」の「いく」「みる」など補助動詞のかな書きは一般的であり，各社の表記辞典にも明記される。特に『教科書』が「「反対側へ走っていった」のように，その意味からは「行った」と表記すべきだと考えられるものもあるが，意味を判断しての使い分けは境界線の引き方が難しく，かえって不統一を招くことになりかねないため，「…ていく」の形をとる場合」はすべてかな書きとするのは，書き手が悩むところだけに卓越した記述である（「来る」も同様）。しかし「ていく」の形によらないものの，たとえば「～わけにはいかない」という言い方の場合にも，実際の用例にはかな書きが多い。「物事が進む」（『岩国』）の意に含まれる「合点が～」「よし，その線で～こう」さらに「これの否定は，不可能・禁止を表す」（『岩国』）とされる「そうは～かない」などになると移動の意味が薄れ，抽象的・主観的な意味が強くなり，「行く」ではなく「いく」と書く傾向が出てくる。

「来る」は『共同』に「「来る」の意味が薄れた場合」として「頭にくる」「かちんとくる」「ぴんとくる」などが挙がる。『新明解国語辞典　第7版』で「その人に直接影響する何かが現出する」と説明される使い方である。「野球とくると飯より好きだ」など「特にその物事が話題となる場合を強調する」の場合も移動の意味が薄く，かな書きが現れやすい。2011年版の『NHK』では，「飽き」の用例に「～がくる」が挙がる。「ある状態に立ち至る」（『岩国』）の場合，「ある感情や状態がどこかから移動してくるわけではなく，自らの体や心の中に生じる」と意識され，移動の意に使う「来る」がさけられた結果であるが，「飽き」「病気」が「どこかから移動してくるようなものだ」と比喩的に解釈するなら，「来る」と書くことも考えられ，書籍，雑誌，インターネットなどでは，表記にゆれが観察される。表記辞典としては，「行く」と「来る」の扱いに整合性が保たれるように気をつけたうえで，明らかな移動を表す場合以

外には，かな書きが使えると明記しておくとよさそうである。

5.2.3 「みる」と「いう」

「みる」は「見る」と「みる」の使い分けにゆれがある。野村（1975，p.219）は視覚的な意味から「だんだんずれていって，「メンドウヲミル」というような場合になりますと，これはかなで表記される率」が高くなると述べていたが，『共同』『読売』は「面倒を見る」と書く。『共同』は補助動詞のほか「可能性が高いとみて，容疑者とみられる」をかな書きの例とし，『読売』はさらに「難事件が解決をみる」もかな書きとする。主語に人以外の物事が使われるため，視覚的な動作という感覚が薄れるからである。「経験する」意の「ばかを～」「憂き目を～」は非意図的な動作であり，典型的な「見る」の用法からずれるため，表記のゆれが生じる。したがって「見る」と書く用法を狭くとるならば「人が意図的に何かを視覚的に捉える」場合のみを漢字表記にする方法が考えられる（ひとまず動物の場合は除く）。一方で「意図的か非意図的かは問わず，視覚に加えて，ほかの感覚をも働かせる場合」を視覚的に捉える場合の延長線上にあると考えれば，どの意味にも「見る」で間に合うとする方法もとりうる。そして「難事件が解決をみる」「作品が完成をみる」などの言い方では確かに人が主語になっていないものの,「警部は事件の解決をみることなく退職を迎えた」「監督は作品の完成をみることなく死去した」など，人が主語になる用法との間に意味的には関係があると感じられ，両者の表記を「見る」にそろえてもよいのではないか，とも考えうる。なお「みる」には「（一般に／世間では）キツネは人を化かすといわれる」における「いう」のような「一般に」「世間では」という意味で使う用法がないため，「具体的な主体が明らかではない」ことが理由となって，かな書きが生じるという可能性もない。

しかし『NHK』の「見る」には「面倒を～。老後を～。（「…してみる」などは，かな書き）」としか書かれていないので，残りの用法については，現場で個々に判断している可能性があり，そのことも考慮すると別の見方が生じる。『NHK 年鑑 2018』では，「原因とみられる」のような「～とみられる」の例が 9 例（「見」は 0），「武道にみる高い精神性」のような「にみる」の例が 4 例（「見」は 0）というように，判断・思考に関する用法では，かな書きが多い。これらは「X をみる」という「みる」に一般的な格構造をとらないことも書き分けの手がかりになる。したがって，これらの用法も漢字表記と指定すると，書き手に抵抗感が生じる恐れがあるので，現実的には，以上の場合はかな書きとするか，用例は現状のままで「表記に迷う場合はかな書き」とでも注記しておくのが無難かもしれない。

「いう」は「と（も）いわれる」の場合，「言われる」が 6 例，「いわれる」が 3 例となり，表記にゆれがある。「といえる」の形では「言える」が 1 例，「いえる」が 3

例である。主体が具体的ではなく，「一般に」「世間では」とでも表されうる用法ゆえにかな書きを選びたくなる心理と，具体的ではなくとも，誰かに言われている，誰かにとって言える，ということを重視する心理とがぶつかる結果である。さらに「と見られる」は「と考えられる」と類義であるというように，視覚的な意味が薄れていると実感しやすいのに対し，「と言われる」「と言える」は主体が誰であれ，本来の「述べる」の意味を維持する点は，漢字派には有利に，ひらがな派には不利に働く。ただし「人というものは」「そういう」など一般にかな書きと解釈しやすい例が多い点は「みる」と異なる。『記者ハンドブック　第13版』（2016，以下『共同』），『読売新聞の用字用語の手引　第5版』（2017，『読売』）は「実質的な意味が薄れた場合など」という説明のもと，これらの用例を掲げる。「あっという間に」「そういえば」「いうなれば」などが共通の例である。これらは「あっと言う間」「言うなれば」（『三省堂国語辞典　第7版』『新選国語辞典　第9版』，「そう言えば」（『三省堂国語辞典　第7版』）など，国語辞典の示す標準表記とは異なる。たとえば「あっ」という驚きのことばを発するわずかな時間の間に，という意味であるなら「述べる」の意味は生きていると考えることもできる。したがって実質的な意味という言い方は『共同』が最後に挙げる「ミシミシいう」の場合に限り（「音を立てる」意），「あっという間」「いうなれば」などは，慣用句・慣用表現はかな書きという扱いにすればよいのではないかと思われる。たとえば，㋐「言う」は，「彼が言ったこと」「彼が～と言う」など自由結合（慣用句ではない名詞と動詞の組み合わせ）の場合に限る，㋑「といわれる」「といえる」など，㋐に挙げたもの以外の「という」の形（具体的な発話行為を表さない）はかな書き，㋒「あっという間」「そういえば」など，慣用句・慣用表現（または連語）として国語辞典に載るような語はかな書き，というように整理すれば運用しやすいように感じる。

5.2.4 「とる」

「とる」は一般的な「取る」および「捕る」「採る」「執る」「撮る」の間で使い分けが複雑である。『共同』は多くの場合「取る」で間に合うと考え，「バランスを取る」（処理する，扱う），「相撲を取る」（遊び・動作・競技をする）のように，手でつかむ意からかなりずれる場合も「取る」と書く。ただし「使い分けに迷う場合は平仮名書き」（『共同』）との注記も添えてある。『NHK年鑑2018』では，「融和的外交姿勢をとっている」など，「選ぶ」「行う」といった意味の場合には，かな書きが5例，漢字表記が2例となっている。「取る」の範囲をごく狭くとる立場に立てば，「商品を手に取る」「人の金を取る」（盗む）など，実際に手を使う場合および「資格を取る」など「取得」に置き換えられる用法を除くと，いずれもかな書きにしたいということになる。まずは用例を最低限のものに限ったうえで，「表記に迷う場合はかな書き」という文言を

付して，しばらく様子を見るというふうにしてはどうだろうか。数年間そのような状態を続けていれば，どのような場合に「取る」または「とる」が好まれるのかという表記傾向が，ある程度わかってくるのではないかと考えられるからである。「表記に迷う場合はかな書き」とするのは，かな書きを，『共同』のように漢字の使い分けに迷う場合の選択肢に限定すると，漢字とかなの使い分けに迷う場合に対処しにくいからである。

5.2.5 「つく」「つける」

「つく」で問題になるのは「付く」と「つく」との使い分けである。「運がいい」ことを表す「ついて（い）る」や「～の理由により」を表す「祝日につき休診」などは，問題なくかな書きということになっても，「見当がつく」「兄についていく」などの場合にどうするのかが難しいところである。『NHK』(2011 年版)の用例においては，「尾ひれが付く」「歯型が付く」など，比喩的な使い方も含めて「付着」の意味に解釈できる場合は漢字表記となっているが，「決着がつく」「差がつく」「見分けがつく」など，付着の意味が薄い場合には，いずれもかな書きになっている。『NHK 年鑑 2018』の用例としても，「放送と通信の境目が一層つきにくくなっており」「めどがつき」など，抽象的な意味では，かな書きが出やすい。「付～」の二字漢語には，後項に名詞要素が来る用法が乏しいため，「湧水→水が湧く」「登山→山に登る」などと異なり，「V(動詞要素）＋N（名詞要素)」からなる二字漢語を手がかりにして和語動詞を漢字で書くという判断がしにくい。

他動詞の「つける」も同様である。こちらには，「尾行する」意の場合に「追ける」「尾ける」「尾行る」とも書く可能性があるからかな書き，という処理が加わる。「それにつけても」「何かにつけ」など，「につけ」の形で使う用法も一般にかな書きである。『NHK』（2011 年版）の用例で漢字表記されているのは「注を付ける」「丸を付ける」「焼き色を付ける」である。「ボタンを付ける」「リボンを付ける」などと比べ，「付着」という感じは薄くなるが，「文字，記号，色など目に見える形をとる」ものの場合，「ボタンを付ける」などに近い用法として意識されるようである。「けりをつける」「渡りをつける」など抽象的な動作の場合は，いずれもかな書きになっている。もっとも『NHK 年鑑 2018』には「字幕をつけて」と「解説を付けて」のような例もあり，「ボタンを付ける」に比べると，迷いなく「付ける」であるともしにくいようである。

このような傾向があるにもかかわらず，辞書に「付く」「付ける」と書く例を大幅に増やすとなると，書き手の直感に反することになり無理が出る。たとえば「以下は慣用によりかな書き」と辞書に示されても，書き手はその語例をすべて覚えることはできず，文章を書くたびに表記辞典を引くことになってしまい，効率的とは言いがたい。

5.2.6 「かかる」「かける」

「かかる」は『NHK』(2011 年版) の見出しには「掛かる (「迷惑がかかる」「疑いがかかる」「時間がかかる」などは，かな書き)」とあり，「かける」は「掛ける　保険を〜。腰を〜。絵を〜。(「圧力をかける」「時間をかける」などは，かな書き)」と記される。「架ける」「賭ける」「懸ける」など異字同訓の書き分けもある。「掛」が訓でしか一般に使うことがなく，「懸命」「架橋」などのようには，二字漢語を頼りにすることができない。この場合の「X がかかる」「X をかける」は「掛」であると断言しにくいうえに，かなで書いても文字数が変わらないことも要因となって，「かかる」「かける」が出やすい。以下に見るように漢字とかなで使い分けようとしても，なかなか統一的な見解が出にくい。

たとえば「かける」について「いすに腰を〜」「肩に手を〜」は「掛ける」が使いやすいものの，「何かのために，ものをそこにとめる」(『岩国』) 意になると，「気に掛ける，手塩にかける」(『共同』)，「気にかける」(『読売』) のように，語ごとまたは社ごとに判断が異なる。「こちらの行動の結果として他に負担を生ずる」(『岩国』) の「親に苦労を〜」「迷惑を〜」では，「苦労を掛ける」(『共同』)，「苦労をかける，迷惑をかける」(『読売』) のように，「働き・力を (増し) 加える」(『岩国』) では「圧力をかける，拍車を掛ける」(『共同』)，というように表記が分かれる。すべて「掛ける」とするか，抽象的な意味は「かける」に統一するかしたほうが個別に覚える必要がなくて書き手の負担が軽くなる。さらに「作用を向けて，そこに届かせる」(『岩国』) 意は，機械を機能させる場合に「電話を〜」「扇風機を〜」「ブレーキを〜」などの組み合わせをとるが，『共同』『読売』ともにかな書きにしている。『共同』は「以下は慣用で平仮名書き」という書き方をするのに対して，『読売』は「実質的な意味が薄い以下の用例では仮名書きにする」という書き方をする。それぞれの用例を見ると，『読売』の用例は，上述したような物理的な動作か抽象的，精神的な動作という区別で処理できるものがほとんどであるのに対し (「拍車を掛ける」は「馬に拍車を当てる」という語源を生かしたものか)，『共同』の場合は「苦労を掛ける」などの例も漢字表記となるため，意味に言及しにくい。漢字表記の慣用を考えると，にわかに，かな書きにするわけにはいかないという『共同』の判断も理解できるが，一般の書き手にとっては難しい使い分けである。

『NHK』(2011 年版) の用例には「病気にかかる」や「王手をかける」があり，「掛」の表記例はない。『NHK 年鑑 2018』では「時間がかかる」「関税をかける」「不思議なメガネ「マチスコープ」をかけて」など「掛」を使う例がない。すべてかな書きとすれば，もっとも書き手にとって負担が小さい。それが無理だとしても「額 (がく) が掛かる」「看板を掛ける」など，「物理的に何か {が／を} どこかに {ひっかかる／ひっかける}」場合に「掛」を限定し，表記に迷う場合というよりは「一般にかな書

きを優先する。「看板を掛ける」など「ひっかける」意では漢字表記も」という程度の注記を記すというのが現実的な処理方法ではないか[8]。あるいは「つく」「つける」の場合を含め，いずれも「①かな　②漢字」というようにしておけば，かな書きの定着が見込める一方で，何らかの理由で漢字が使いたい場合にも対処することができる。簡潔に記述することを方針とするなら，こちらのやり方のほうが無難である。

6.　おわりに

本稿は『NHK』をもとに戦後の動詞表記について考えた。「常用漢字表」に漢字と音訓が示されていても，動詞の意味・用法によって，かな書きが多くの人に支持されるということもあり，何でも漢字で書けば済むというものでもない。以上に見た語のほかにも，かな書きになりやすい動詞は少なくない。「（人と）ふれあう」は「接触のみ」「接触＋交流」「交流のみ」のいずれをも表しうるが，「触れる」だと「べたべたさわる」という語感が出て「漢字が邪魔になる」恐れがあるので，意味にかかわらず，かな書きにするという方法もある。意味による漢字とかなの書き分けについても検討すべき点は多い。たとえばNHK放送研究部（1996，pp.54-55）によれば，1996年2月8日の第1158回の放送用語委員会で「獲物を狙う」「狙い撃ち」など「狙う」「狙い」と書いてもよいことにし（1981年の「常用漢字表」に「狙う」はない），「ただし，「経費節約をねらう」「企画のねらい」などのように，比ゆ的に使う場合は，なるべくひらがな書きにする」と決まった。「獲物を狙う」などは漢字で書く慣用が強く，新聞でも漢字表記をすでに採用していること，「企画のねらい」などはかな書きの慣用が強いことを理由に挙げている。しかし本当に意味による書き分けはあるのだろうか。「当用漢字表」（1946），「常用漢字表」（1981）の時代には「ねらう」「ねらい」はかな書きが原則であった。しかし「狙撃」などの漢語もあるため，「獲物を狙う」「狙い撃ち」に「狙」を使いたくなったものの，「企画のねらい」などについては，特に現場の要望がなかったということに過ぎないように推測する。新聞が「狙う」「狙い」を採用したときよりも前から紙面に漢字表記が見られたということであれば，個々の記者が勝手に表外字の「狙」を使ったことになり，新聞としては問題である。また一般の書籍や雑誌に使われていたということであれば，漢字表記とかな書きの実例数および意味による書き分けの有無を示す実例数を示したうえでないと，上記のような決定は下せないのではないかという疑問が残る。複雑な書き分けを示さないほうが運用しやすい可能性も考慮すべきであろう。同様の現象が見られる動詞を数多く集め，その表記を整理する必要がある。

注

(1) 表記は放送（特にNHK）よりも新聞を参考にするのが普通であるという向きもあるが，ここではその考え方はとらない。新聞が表記に関し細心の注意を払うことは事実であるが，現実問題として新聞読者の減少に伴い，その表記を自分が文章を書く際の参考にするという人も減っていると考えざるをえないからである。テレビを見る人も減っているとは言われるものの，それでも何らかの形でNHKの番組を見るという人は少なくない。Eテレ（旧教育テレビ）のように，子どもを対象とした番組をたくさん作るチャンネルもある。それゆえ子どもが成長する過程において，NHKの表記は教科書の表記と並んで無視できない影響力を持つというのが本稿の立場である。

(2) 1958年に刊行された『テレビの用字用語と書き方』という本もあるが，当時，NHK放送文化研究所に所属していた菅野謙氏によれば，この本の用例集は「主として文字一字一字についてその漢字は書けるかどうかということを重点に編集した」ものであって，個々の語の表記について検討したものではない（中村，見坊ほか（1964,p.13））。それゆえ本稿の考察からは除外する。

(3)「表す（あらわす・ひょうす）」「断って（ことわって・たって）」などについて「送りがなのつけ方」（1959）では，前者を「表わす」「断わって」と書くことにより区別できるようにした。

(4) たとえば「社内調査の結果，千三百四十七億円の含み損の存在が確定的となり，調査委員の顧問弁護士は，投資家との関係があるので早期の決算修正発表を求めた。しかし経営陣が，債務超過回避策と併せて発表することにこだわり，結局，一ヵ月以内に第三者割当増資のメドをつけ，決算修正を発表することになった」（黒木亮『排出権取引』2011，角川書店）という用例がある。この小説では「にあわせて」と「とあわせ」のゆれは観察されない。このような「名詞＋と併せて」の存在は記述する必要がある。記述の際は「に合わせて」と「と併せて」との区別をわかりやすく示す必要がある。

(5) ほかにも動揺が生じている異字同訓の動詞はいくつもある。たとえば「望む」「臨む」について，「海を臨む」にしたいという声がある。そのような意見を持つ人は「海を望む」つまり「見る」ことと「海に臨む」つまり「面する」ことのうち，後者の使い方を知らないため，「に」を使うことに違和感が出，「望む」と同じ格助詞を使いたくなる。しかし「試合に臨む」などの場合も「を」を使いたいという意見にはならない。「海に臨む」と「試合に臨む」には「じかに接する」という意味が共通する。それを無視し「海に臨む」のみ「海を臨む」でもよいとするのは，語ごとの意味のバランスを崩すことを意味する。近視眼的な判断が危険であることを示す好例である。

(6)「重ね重ね」「数数」など同じことばを繰り返す場合を除くと，1語の中に同じ漢字が二つ以上あることを嫌う傾向がある。『NHK』が「好き好む」「抱き抱える」「出出し」を「好きこのむ」「抱きかかえる」「出だし」とするのがその例である。

(7)「〈座談会〉正書法は可能か」（『言語生活』53）で朝日新聞の宇野隆保氏は「いる」はかなで書くにしても，「居留守」「居候」は「い留守」「い候」とは書かないと指摘する。

(8)「保険を掛ける」の表記は「掛け金」という語があることを考慮した可能性があるが，特例的な場合と考えるべきか，それともほかに類例があるのか，かえってわかりにくくなる。名詞の場合は「掛け～」の表記を用いるとしても，動詞としては「かける」とすればよい

と考える。「名詞＋助詞＋動詞」という通常の文の構造を考えるならば，その最初に位置する名詞が漢字かな交じり文において，もっとも漢字の必要性が高い品詞である。それゆえ，場合によっては，名詞と動詞の表記に差を持たせることに意義がある。

参考文献

宇野隆保，丸野不二男，藤井継男（1956）「〈座談会〉正書法は可能か」『言語生活』53

NHK 放送研究部（1996）「〈放送用語委員会（東京）〉「素地」の読み・「ねらう・ねらい」の表記　用語の決定」『放送研究と調査』46-4

菅野謙，安倍真慧（1970）「新しい音訓表と放送の用語」『文研月報』20-9

寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集Ⅱ』くろしお出版

中村通夫，見坊豪紀ほか（1964）「〈座談会〉「放送の文字とことば」」『文研月報』14-3

西谷博信，安倍真慧（1972）「放送で使う新しい用字用語」『文研月報』22-11

野村雅昭（1975）「かなと漢字の機能」『シンポジウム日本語④　日本語の文字』学生社

浜田敦（1961）「表記論の諸問題」『国語国文』30-3

宮島達夫（1970）「和語の漢字表記」『教育国語』23